長野大学紀要　第20巻第1号　68—75頁　1998

生活世界とメディア文化

Life-world, as inter-reflected images in the media-culture

高　橋　　徹*
Toru Takahashi

《目　次》

1.　生活—世界
2.　言葉の世界
3.　現実の世界
4.　虚構の世界
5.　物語の世界
6.　偶然の世界

1.　生活—世界

生活世界—生き生きとした意味に満ちた世界と、今日のメディア文化、環境化したメディアとの関係について、本稿では考えてみたい。ところでメディアの環境化—「情報化の進展」と呼ばれる現象は、私たちに何をもたらしたのだろうか？産廃にあふれるゴミのように膨大で多様な情報の渦にのみこまれて、そしてそれを処理する忙しさの中で、「私」はコミュニケーションの深さと充実を喪失してしまっただろうか？　いつでもどこでも消費される、情報のシャワーを浴びているうちに、私の中に生まれ出すはずの、生き生きとした意味に対して不感症になってしまいつつあるだろうか？生活のリズムと生体としてのリズムは乖離しているようだ。環境のリズム—生態系と生活のリズムとのズレの、問題も明らかになって久しい。他者との関わりが希薄になり、現実と虚構との区別が曖昧になる…。

メディアに対する不透明な感覚が広がってきていることは確かだと思う。かつてのように、情報ネットワークの広がりの中に、退屈を解消してくれる未来のユートピアを見いだすことは相当に難しい。そこにあふれているのは際限のないおしゃべりと、見通しのない剝き出しの競争—グローバル・スタンダード—、そしてフレーミング問題やインターネット犯罪のニュース。だからといって「私」は、メディア文化を切り捨てることはできないだろう。スイッチを切りさえすれば、すばらしい何か—失われた幼年時代の黄金の輝きのようなもの—が還ってくるというわけではない。

「私」は意味の中を生きる。ただ生きるのではなく、意味を生きるためにコミュニケートするということを捉えていかなければならない。そのためには、「生活世界の復権」という概念は、今日でも重要だろう。フッサールによって30年代のファシズムの進行期に、近代という時代自体を「危機」と捉えるための準拠として提示された「生活世界」は、60年代の管理社会化の進行の中で、現象学的社会学によってリアリティの根拠として注目された。また、80年代にはハーバーマスによって情報化—消費社会化の進行の中で、巨大化する政治—経済システムへの批判の根拠を示す場所として、再び注目されてきた。「私」の生きるこの「世界」は、システム論が前提とするような—効率の良い生産のために維持される、「私」とは無関係な匿名の秩序—ではなく、「私」にとって意味のある世界なのであり、「私」にとって意味のある他者たちとの間主観的—間身体的なコミュニケーション—語らいによって、システムの論理とは別のものとして構成される世界であるはずなのだ。つまり生活世界に注目することとは、その時代に社会的に自明視されている「現実」と「私」のあり様を相対化し、批判的思考の対象にしよう

*非常勤講師

とする試みのことであった。

とはいえ生活世界への注目は、何か一つの安定した地盤や地平—解釈枠組のようなものから世界を見ようとすることではない。そうではなくて、自分の「現実」や「私」に対する解釈枠組が、私とあなたと社会とを「意味づけ」が循環するコミュニケーションのプロセスの中で、絶えず再構成つまり維持され、作り直されていることに対して気づこうとする試みなのだ。

しかし、「私」を流れていく意味の循環を、私は「私」から離れて観察することはできない。だから私の中をどのように意味が流れていくのか、私は意味をどのように読み、どのように応えているのか、追求することから始めたい。

2.　言葉の世界

意味のある世界の中を生きること。これは何も人間だけがそうしているわけではない。あらゆる生物は、その環境世界を身体という媒体（メディア）によって構造化し、構造化されたその身体に固有の世界の意味を生きているのだ。人間もまた固有の身体と、身体による構造化された意味の中を生きているだろう。生まれたばかりの乳児でさえも、身体は他者と共振するのだという。しかし、この共振が、「意味」のあることだと知ったとき、私には既に忘れ去られている最初のショックが訪れたはずだ。私たちの身体が対象をなぞり、対象に向かうように、私たちは語らう他者たちの言葉をなぞり、言葉に向かわなければならない。言葉を意味として、意味を言葉という媒体（メディア）の意味として聞き取ること。そうして私たちは、「私たちとしての私」を手に入れる。このように「私」にとって意味のあるものはすべてメディアであり、メディアとは単なる情報伝達の装置ではなく、「私」が「社会的世界」に関わる仕方を構造化する装置なのだ。

言葉という特権的なメディアにより、私たちは連続する世界の意味を、非連続なものとして構造化する。言葉において「私」の意味は、私たちの意味であるとき始めて有意味になる。こうして生活世界とは、なによりもまず語りの世界なのだ。モデル的に描けば、対面的な持続する関係の中で、私があなたに話したことが、あなたに共有され、承認されて私に還ってくるとき、「類型・習慣」が構成される。「類型・習慣」がひとまとまりの秩序として、つまり物語として私たちに共有されれば、そこには神話的・象徴的な（「生の」ではない）「現実」と「私」とが構成されることになる。近代自然科学の自然主義的で「客観的」な認識の態度の下層にも「忘れられた意味基盤」としての生活世界、語りの世界があるということ。それゆえ、私たちは話し続けなければいけないのだ。現実が現実であり、私が私であるために、道で、電車で、携帯電話で話し続けていなければ、私はあなたと分離して、現実も私も崩れてしまうだろう。

しかし、私はあなたではない。そう気づくためには文字の力が必要だ。あるいは、そう気づいてしまったために、文字が必要とされたのだろうか。文字を意味として読み取ること。そこでは文字は、語らいの時間のように、あなたと同じ時間を保証しない。あなたの読む声を聞いていても、私に読まれる文字は、「私たち」からほんの少し、しかし決定的にずれてしまう。文字がなければ、私の、私やあなたや世界に対する想像は、私たちの中に回収されていただろう。想像の過剰への誘惑—あの夜、日記を書きさえしなければ、私はあなたを不安に思うことはなかったはず。そして夜の手紙を書きさえしなければ、明日も昨日と同じようにあなたと過ごせたはずなのに。

「私」に気づく時、現実は多元化されている。「私」は、「私たち」と、もう既に同じ現実を生きることはできない。「私」は「私たち」の常識的な世界—世間—に違和感を感じてしまう。その平和で怠惰な内輪の世界、神話的な呪術の園に対して、憧れと憎しみを感じさえするだろう。こうして私的領域を持った「読書する公衆」によって、語らいの場は討論の場、公共空間に変換され、近代化の運動が開始する。同時に語る私—書く私と、語られる私は決定的に分離して「考える私がいる」と書いてしまうかもしれない。

少し急ぎすぎただろうか。事態はこのように図式的に進行するわけではない。しかし私たちの生活史をたどり、ライフステージごとのコミュニケーション枠組の変化に注視するとき、私たちの生活世界は、日常生活の中では忘れられている、言

葉によるいくつかの層によって区切られていることに気づくはずだ。しかし今日の生活世界を考える上では、検討しなければいけない領域がある。マス・メディアによって媒介される、ポピュラー・カルチャーの世界だ。

私が生まれたときには、テレビが既にあり、2歳の時には、東京オリンピックの中継を見ながら旗を振っていたのだといわれる。小説を読むよりも先に、アニメ番組に夢中になっていた私の幼年期の終わりは、一人でラジオを聴くことから始まったのだと自分自身の生活史をふり返りながら気づく。私にとって、生き生きとした意味のある世界とは、対面的な語りの世界と同様に、テレビやFMラジオやCDの中に、あるいはライブハウスでPAを通して聞こえてくる、歌い手の声の中に広がっている。以下では、言葉による世界の構成を参考にしながら、生活世界に対するメディア文化の意味について考えていこう。

3.　現実の世界

ところで前節で述べたように、私たちにとっての意味が「言葉の意味」でしかないのだとしたら、言葉以前の「生の現実」というものを想定することはできなくなるはずだ。つまり私にとっての「現実」とは、現実として語られたもののことだろう。例えば一枚のスナップ写真を見てみればいい。写されている現実とは、言葉によって語られるものだ。

もちろんここにはねじれがある。私たちの身体は、壁があれば壁にぶつかってその先に進めないし、穴があれば落ちてしまう。しかし、壁のないところにも、そこに壁があると語られるときには、その先に進むことができなくなるのだ。例えば国境のことを考えてみればいい。あるいは男と女の境界、あるいは大人と子供の。つまり「現実」とは、現実として語られ、境界によって区別され、その区別が「私たち」に共有されているもののことなのだ。「皆が信じている」という虚構を皆が信じているとき、はじめて現実は「現実」になる。それ自体は何の価値もない印刷された紙切れが、あらゆる商品と交換される価値を持ってしまうように。

かつては、現実について語りうるのは、共同体のメンバーたち、あるいは共同体を代表する宗教であった。今日では、それはマス・メディアの仕事だ。現実について語ることがどのような行動を引き起こすのかについて、アメリカのマスコミ効果研究の知見を簡単に整理しておこう。かつて信じられていたように、片方に強力な情報の発信者がいて、もう片方には盲目の、メディアに言われるまま、皮下注射されるように説得されてしまう、一方的に受身な大衆がいる（弾丸モデル）というわけではない。コミュニケーションの流れはもっと多元的であり、行動の決定に重要な要因は、むしろ能動的な視聴者である、その人の対人関係にある（限定モデル）。ただしどのように能動的であるのかは、つまり何についてどのように対人関係の中で検討するのかについては、マス・メディアがある種の調整の働きを担っており（議題設定論）、それゆえメディアが、何をどのように語っているのかについて主体的に判断する能力（メディア・リテラシー）が必要だ、というわけだ。そこで北米では、正しいメディアの利用についての教育が試みられ、正しくない内容を持つ番組に対しては規制が試みられている（日本でも神戸の連続児童殺傷事件をきっかけにした、中央教育審議会小委員会で「Vチップ方式」の導入が提言された）。この考え方は、メディアの外に「正しい現実」が生のまま存在しているということが前提されている。あるいはジャーナリズムの中立性・公平性という議論も、普通には中立であるべき「現実」を前提にしているだろう。しかし、ここまで議論してきたように、メディアの外の「現実」もまた、メディアによって語られた現実でしかありえないのだとしたら、「正しい現実」とはいったい何ものなのだろう？　誰がどのような場所から、どんな権利によってそれについて語ることができるのだろう？

ここで記号論によるメディア分析の古典的試みである、ロラン・バルトの「神話作用」について、検討しておこう。よく知られているように、記号が意味をもつ（意味作用）ということは、記号によって意味されるもの（シニフィエ）―例えば「バラの花」―が、記号として意味するもの（シニフィアン）―例えば「バラ」という音のイメージ―と、記号の読者である私において結びつ

く（接合）という事態だ。ところで私には、この第一次の意味作用（デノタシオン）自体をシニフィアンとして、そこに書かれていないシニフィエ—例えば「情熱的な女」—を、二次的な意味作用（コノタシオン）として、暗黙のうちに読み込んでしまう、結びつけてしまうという事態が起きる。これ自体は自然な記号の働きだ。例えば歌を聴くときに、私たちは歌詞に歌われていないことまでを、自分勝手に聴き取ってしまうように。この多義的な意味の広がりの中に誘い出されることは、歌を聴く、そしてあらゆる記号を読む悦びの重要なポイントだろう。

しかしマス・メディアを読むときには、いつでも自由に意味の広がりを楽しめるというわけではない。メディアのメッセージは、ある種の人々にとって都合のいい話や特定の価値観を、あたかも「自然」な意味として、暗黙のうちに伝えようとする働き、同意の強制、共同性の暴力、つまり政治的な二次的意味作用—神話作用—をもっていることがあるというわけだ。バルトは「雑誌に掲載された、フランス国旗に敬礼するニグロ兵の映像」を例として説明している。アルジェリア問題の起きていた当時のフランスにおいて、この映像がどういう二次的な意味作用の働きをするかは自明だろう。あるいは同じように、「祭りを村の人たちと一緒に楽しみ、親睦を深める米軍基地の兵士」というある日のニュースの映像が、「米軍基地移転に関する住民投票」問題にとってどういう意味の働きをしたか考えてみてもいいだろう。今日でも神話分析のアクチュアリティは失われてはいないのだ。ニュースは事実を伝えるといわれる。私たちは、それを「現実」だと受け入れる。けれどもそこで「自然」な「現実」といわれていることは、いったいどういう意味をもっているのか、「私」はそこで、何を「現実」として読み取っているのか、注意しなければいけないということに、「神話作用」という考えは気づかせてくれる。このことは今日のイギリスの文化研究の用語では「接合／分節」（articulation）の問題になる。

「話すこと」を意味するこの言葉は、二重の意味をもっている。話すこととは、ソシュールの構造主義言語学的な意味では、「節に分けること」である。そして英語では同時にこの言葉は、離すことができるものを「結びつけること」を意味している。つまり分けることは結びつけることなのだ。「フランス国旗とニグロ兵」の二次的意味作用の例では、どんなことが起きていたのだろうか。ここではまず「ニグロでも白人でも、皆フランス国家の栄光に忠誠を誓う」という考えと、「フランス帝国主義は、いまだに植民地支配政策によって、白人以外の人間の自立を妨げている」という考えとが分けられている。そして前者は、普通のフランス人である「我々」の考えに、後者は我々にはよくわからない危険な「彼ら」の考えに「単純化・簡略化され」て結びつけられる。この結びつきには何の必然性もないのだが、そういうことに気づく間もないうちに、読者は「自然」に同意を強制され、それ以上論じられるべきことはないかのように錯覚し、その話題から関心をなくし、次の話題へとうつろってしまうのだ。

しかしでは、神話作用に気づきさえすれば「本当の現実」を知ることができるのだろうか？　メディアの語る「現実」が「神話」でしかないのとまったく同じように、「神話批判」の語りもまた、もう一つの神話でしかありえない。「生の現実」はどこにもない。しかしだからといって「メディアは嘘ばかり言っている」というだけでは何の意味もないだろう。そうではなくて、神話批判の試みは、いつのまにか同意し、関心をなくしている自分のあり方、自分が「自然」だと感じている「現実」のあり方を、多義性の中に宙吊りにして、議論の対象にすること、そのようにして「私」と「現実」のあり方を、常に再構築し続けること、そしてこの運動の中に、自分にとっての「真実」を見いだすことへの誘いなのだ。

4.　虚構の世界

見田宗介（1995）は戦後史を三つの時代、順に「理想の時代」、「夢の時代」、「虚構の時代」に区分できるという。80年代以降、高度成長期とオイルショック以降の、私たちが生きる今日の「現実」は、いつか実現される「理想」や「夢」への途中の時間—空間としてではなく「虚構」という「反現実」を参照することによって「現実」として組織されているというわけだ。家族や友人とのコミ

ュニケーションは、演技する「私」(「やさしい私」)のゲームと化し、盛り場や住宅地は、土地の固有性を失ってテーマパークと化した。新・新宗教や終末論の流行を背景にして、記号の差異の戯れの快楽がうたわれたこの時代の内実は、見田も言うように、情報資本主義—消費社会、情報による欲望と市場の創出と管理による、効率追求のヴァージョン・アップでしかなかった。とはいえこの時代の人々が一方的に、資本のシステムに操作されていたわけではないだろう。例えば「松田聖子」から「おにゃんこくらぶ」という「アイドル現象」を振り返ってみれば、あるいは「ニュース・ステーション」や「ニュース23」といったニュース・ショー番組のある程度の成功について考えてみれば、ここには「スターの神話」や「客観報道の神話」の解体—脱神話化と、メディア文化を主観的な意味の世界に引きつけようとする試みの跡が見られるはずだ。しかしそれにしても、今日の「私」の無力感は何なのだろう?。整備され、意味に満ちたはずの「郊外」の空虚さは何なのか?　そしてSMAPが歌う「ヨゾラノムコウ」のリアリティは何なのだろうか?　そこで次に、情報消費社会の主要なエージェントである「広告」の意味作用について考えてみよう。

広告のメッセージは、いうまでもなく「商品の告知」である。19世紀末の新聞以降、マス・メディアの収入は購読料ではなくて広告掲載料であった。やがて広告産業は、単なる広告スペースの販売業から、企業の商品戦略全体に関わる知識産業へと変換し、消費者の特性や欲求を調査し、説得しようとする。下条信輔(1996)によれば、広告はただ繰り返し経験するだけで好感度が上がる、サブリミナルな親近性効果があり、またこの効果に気づかない場合、その好感度は「コマーシャルの影響ではなく、自分本来の好みなんだ」という主張—自分に対する説明—によってますます上がることが、実験によっても確認されるのだという。

また今日の広告表現の主役は、商品名とその品質・効用—物としての商品自体—ではなく、商品を使う消費者の自己像、社会的自己イメージの提示にあるのだという(吉見・水越、1997)。広告は、人々の未分化で曖昧な夢に具体的な像を与え、日常の些細な出来事を演劇化し、好みや楽しみ、「ライフスタイル」に特定の意味づけをしていく、意味論的な装置なのだ。そして人々は、消費をつうじて広告が演出する「物語」の登場人物になっていく。こうしてモノは自己のアイデンティティのよりどころ、大切な鏡なのだ。ブーアスティンにならえば、こうした事態は「擬似イベント」、メディアが事実を捏造していると批判されることになる。こうした「イメージ広告」は、前節で見たような単純な「神話」ではない。その二次的な意味は、送り手が一方的に送ってくるのではなく、受けてが自ら進んで読み解いていく。そこには自分から進んで参加するための余白—誘惑が用意されており、受け手にとっては意味の共犯関係に入ることなのだ。

というのも、「欲望とは、他者の欲望への模倣欲望」(ジラール)なのであり、自分の欲望の対象が本当になんなのかは、自分の中を探しても見つからないからだ。おそらく、「理想の時代」には、理想という神話を共有する地域社会や、家族、あるいは会社共同体の中に模倣すべき自己を探すこともできただろう。しかし高度成長期にともなう地域共同体の、そして家族の解体によって、解放された欲望は宙吊りにされてしまう。そこで「私は誰?　ここはどこ?」という問題に応えるのは、広告をはじめとするメディアの役割なのであり(というか、あらゆるメディアは何らかのスタイルの広告だろう)、それは虚構とわかった上で、「幸せな私」を演じることが、演じることを楽しむことが「虚構の時代」の消費社会における「私」のあり様であった。

虚構の世界とは、読み手によって編集された、自律する「テクストの快楽」(バルト)—記号の差異の戯れの世界であったといえるだろう。テクストの意味は、読み手の違いにしたがって、多くの異なるテクストとして生産される。このときテクストを読み解くために参照される根拠はテクストの中にしかなく、最終的に意味されるものという「神話」は解除される。つまりテクストの意味は、他のテクストとの相互性の中に開かれており、支配的な文化がテクストの背後の「語らい—言説」として強制しようとする分節—接合の「神話作用」は、対抗的な読みによって相対化され、

記号のコードが解体—再構築される。この意味生産の場では、読み解く主体もまた、そのつどにテクストとして編まれ、最終的で抑圧的な「本当の私」に到達することはない。しかしそれは合わせ鏡の世界のように、めまいの中で、あらゆる根拠や深さの神話を、そして現実や他者との関わりを失って自分にあるいは閉ざされた「世間」に閉塞していくプロセスでもあった。このテクストの中で、私はどのように意味と快楽を産出し、リアルな「現実」や「私」を編んでいるのだろうか？
もうすこし考えを進めてみよう。

5.　物語の世界

ここまでの議論で、ふだんなにげなく、意識せずに見られているメディア—テクストの意味が、テクストとして、多元的な読み取りという言説の闘争の場に、「政治的なもの」として生成しているということを確認してきた。テクストが、あからさまに政治的である場合、言説の闘争が可視化されている場合はあまり問題にならない。それは「コミュニケーション合理性」の問題でしかないからだ（それこそが問題だという立論はもちろん正当なものだが）。ここでは続けて、メディア—テクストに「現実らしさ—リアル」を感じてしまうことについて考えてみたい。

情報化の進展という事態の一面は、「場所意識の喪失」として語られてきた。例えば携帯電話で、いつでもどこでも、「好きな人とつながってる」場合について考えてみよう。そのとき電話している彼／彼女にとって、どこにいるのかや、誰といるのかは関心の外にある。つまり場所の固有性や、他者との関係によって作り出される場の意味が崩壊する。電車で偶然一緒にいるだけの、見ず知らずの他人の「電話」が不快なのは、また居間で長電話する子供に対する家族の困惑も、そういう無意識のうちに共有されている「現実のズレ」から起こる。彼／彼女にとって他者である私は、「現実」としては存在していないのだ。このことは近代化のプロセスの延長線の出来事であるだろう。

声というメディアを中心にして構成された前近代の時間—空間は、地域に固有の場所性と場を共有している「我々」—共同体に固有の文化によって地域ごとに編まれていたはずだ。そこでの「現実」は、私たちの失われた子供時代の時間—空間のように、ゆれ曲がり、のびちじみするものだったのではないだろうか。「呪術からの解放」後を生きる近代人にはわけのわからないものでしかない共同体の民俗は、彼らにとっては十分に合理的で「現実的」であるということだ。（いやむしろ近代人の「現実」のほうこそ、持続的に生きていく人間にとっては、非現実的で、非合理的ではなかったか…）

一方近代の文字メディアを中心に構成される時間—空間は、帝国の首都を中心とした、秩序をもった均質な、明確に固定した空間と、一定に流れる時間として編成される。そこでは、地域は既に「我々」の「現実」世界の中心ではなく、場所に固有の歴史的・社会的な意味や文脈を失ってしまう。都心を中心に同心円上に位置づけられ、計量し比較することが可能なデータとして「物件化」（若林、1998）—消費される商品として、情報化された土地の断片へと変容する。ここまでくれば「現実」を、好みによって選択される記号によって構成し、どこに誰といるのかということからは解放される電子メディアを中心に構成される時間—空間という事態まではひといきだ。

つまり、「現実的である」ということは、ただの現実がまずあって、それをメディアが正しく伝えたり、歪めたりするということではなく、またメディアによって虚構との区別がつかなくなるとかいうことではなく、そもそもメディアとの関わりによって構成される社会的な産物であったのだ。私たちの身体が感覚するものが現実であるとするならば、それはあまりにも多様で、わけがわからなくなってしまうだろう。感覚されたものを限定して、現実「として」意味があるものに変換し、現実に対する支配的な感覚をもつことができるとき「現実らしさ」が生まれるのだ。この変換装置、無意識的な認知モデル（レイコフ、ターナー）をここでは、「物語」とよぶことにしたい。

「物語」とは、統治的な進行の構造—始まり・移動・結果といった一定の時間の順序の中で出来事が位置づけられること—と、範列的な深層の構造—登場人物や出来事に対するカテゴリー化と我々／彼ら、善／悪、正常／異常というような分

節・接合による意味秩序の位置づけ―とによって、経験を構造化する装置である。「未開」社会では神話物語によって「この世界とは何なのか」「おまえとは誰なのか」という問題を解決し、彼らにとっての、「我々」のリアリティとアイデンティティを保証することができる。つまり「私」が「現実」と関わろうとするときには（そうして始めてリアリティが生まれるのだが）、どのように関わるのかについての「物語」が必要になるのだ。

フィスク（1996）は、そのテレビ番組の分析において、物語における「リアリズムの形式」に注目している。18世紀の近代小説に起源をもつリアリズムは、経験主義と個人主義、資本主義とブルジョワ市民のもとで発達した物語の形式である。それは人間の感覚によって正確に経験される「客観的現実」という「信念」に基づいており、我々がその形式によって意味を作り出すことによって、逆にそれらが我々―産業社会を生きる近代人を作り出したのだ。今日のテレビ番組テクストでは、「リアリズム」は三つの形式として理解することができる。第一には「読者主体の定位」。テクストは、「白人―アメリカ人―男―中産階級」とか、「自立する女―大阪人―商人」とかいった、ある社会的立場を中心に描かれるが、読者はその立場を占めることによって、テクストを容易に理解することができる。第二には「言説の階層構造化」。テクストには対立する言説が内包されているが、読者には、エピソードの全体を理解し評価することのできる手段として、明確には記されることのない真理を語る、特権的な視座の言説が用意されている。小説の場合は著者の立場（「その時まさに…」「本当は…」）として描かれていたが、テレビの場合は映像効果や音響効果、ナレーションなどによって示される。この視座を受け入れることで、読者はある社会的立場を代表する、言説の主体として自己を構成することになる。そして第三に「動機づけられた編集」。リアリズムのテクストでは、テクストの編集者、番組の監督の「仕事」は、できるだけ見えないように編集される。その結果、カメラが収録する「現実」の出来事自体が編集を決定するという印象を与え、「自然」な流れという効果が産出されるのだ。その結果、読者は全てを見て理解できる全能の神、あるいは不可視の窃視者の立場におかれ、「現実は我々の前に、むきだしのままおかれている」という感覚を引き起こされる。以上の形式によって、リアリズム物語から、「現実」と「立場」の人為的で構成的な性質は隠されてしまい、読者に、「現実」に対して疑問を投げかけることは不可能で、それは変化することはない、という感覚を現出させることになる。そしてこれは単にドラマだけの話ではなく、ドキュメントやニュース映像にもそうと語られぬまま、使われる技法なのだということには、注意をしておきたい。

このリアリズムの形式は、未来がこの現実の延長として予期可能な場合は、確かに現実に対する固定した、安定した解釈枠組を提示してくれるのだが、現代のように現実と自己の枠組自体が変動する時代において「リアルさ」の感覚をもたらすこともできないだろう。今日の私たちに必要な物語とは、説明し、解釈することで位置づける物語ではなく、安心できる特権的立場を破壊し、それと一致した「全能」の自己満足的受容にショックを与えることにより、「私」に異化効果（ブレヒト）を与え、そうすることで自分と現実とがかかわりあうことを可能にするような物語のはずだ。そのために、テクストを読む試みの中で、リアリズム物語に回収されないような、何かリアルなものを探し出す必要があるだろう。そして自分の枠組によって排除されているものに対する想像力は回復すること。それはもちろん共同体をただ昔のまま再生させることをゆめみたり、「本当の現実」を探してまわるということではない。そうではなくて、リアルを感じるときに自分に何が起きているのか、注意深く耳をすます作業を続けること。それこそが今、自分が生きている世界に、生き生きとした意味を取り戻すために、そして現実に対して関わるための枠組を形成するために必要な作業の第一歩ではないだろうか。

6.　偶然の世界

意味の充実した物語に覆われた、あるいはいつまでも充実することのない意味の戯れに覆われた（結果的には、この二つにはあまり差がないようだ）、平板な日常生活を、突然「リアルさ」が襲

うことがある。例えば偶然ふと聞こえた音楽の中に、突然子供時代の忘れていた生活の記憶がわきおこる「想起」の経験をすることがあるように。新宮一成は次のように述べる。「二つの音楽に共通する決定的な特質を私自身は見つけだせない。しかしその共通性こそ、私の過去において確かに存在した感情を今の私の心につないでいる。このような私の中にあって私のものではない音の流れの存在を考えるとき、私の個人的な同一性が、それに強く依存していることを認めないわけにはいかない。」(新宮、1997、p. 37)

あるいはバルトの「温室の写真」経験や、プルーストのレミニサンス体験を含めたいくつかの喪の経験をたどりながら、石川美子は「時間のめまい」を経て、時間一失われたときを手に入れるという試みについて論じている(石川、1997)。

言葉と物語に覆われた「現実と私」に、意味一音や写真が、あるとき偶然に私に触れていくこと。そのめまいの中で、私が私から離れ、他者に出会うとき。リアルを感じることとはおそらくこのような経験とつながっているように思えるのだが、これはまた次の機会に検討してみたい。

(1998. 4. 6　受理)

文　献

アルベルト・メリッチ『現在に生きる遊牧民』1997、岩波書店
フレッド・イングリス『メディアの理論』1992、法政大学出版局
『現代思想　総特集スチュアート・ホール』1998、3月臨時増刊
花田達郎「公共圏と市民社会の構図」1993、『岩波講座社会科学の方法Ⅷ』岩波書店
石川美子『自伝の時間』1997、中央公論社
ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー『詩と認知』1989、紀伊国屋書店
ジョン・フィスク『テレビジョン・カルチャー』1996、梓出版社
西原和久「社会学と現象学」1998、『情況　1998年1・2月合併号』情況出版
見田宗介『現代日本の感覚と思想』1995、講談社学術文庫
大澤真幸『虚構の時代の果て』1996、ちくま新書
佐藤慶幸『生活世界と対話の理論』1991、文眞堂
佐藤　毅『マスコミの受容理論』1990、法政大学出版局
下条信輔『サブリミナル・マインド』1996、中公新書
ロラン・バルト『神話作用』1983、現代思潮社
ロラン・バルト『明るい部屋』1985、みすず書房
新宮一成『ラカンの精神分析』1995、講談社現代新書、『無意識の組曲』1997、岩波書店
内田隆三編『情報社会の文化2』1998、東京大学出版会
矢谷慈國「生活世界の社会学」1997、『追手門学院大学人間学部紀要5号』
吉見俊哉、水越　伸『メディア論』1997、放送大学教育振興会